

# 若者の自然観と環境問題

## —インタビュー調査による予備的考察—

### View of Nature of the Youth and Environmental Issues: Preliminary Study by interview research

川端 美樹  
(Miki KAWABATA)

#### Abstract :

The purpose of this paper was to discuss Japanese youth's view of nature and environmental issues. Environmental issues are very important agenda in the society and how people think about nature may affect their attitude and behavior on environmental issues. According to some survey data, recently young generation tend to think about nature to be more remote, untouchable, and spiritual. To deal with the environmental problems, the attitude toward and view of nature of young people are crucial. In this research, the author interviewed 10 college students about their view of nature and their attitudes about environmental issues, science, religion, and disaster. As the result, young college students tend to think that nature should not be modified by human. They think science and nature are conflicting concepts and nature always defeats science. Even though most of them go to shrines and temples and worship their ancestors at the grave, they think they are not religious and have no religious beliefs. About the disaster, they do not have self-efficacy about dealing with disastrous events. Those results are consistent with the existing research. In conclusion, the importance of the education about nature and science was discussed.

キーワード：環境問題、自然観、若者、インタビュー

Keywords : environmental issues, view of nature, the youth, interview

#### 問 題

##### 1. 環境問題と自然観

ますます深刻になる環境問題の解決が喫緊の課題となる今日、様々な分野からその解決へ向けての対策が必要となっている。自然をその大きな要素とする環境問題は、人々の自然に対する考え方、すなわち自然観がその問題への見方や問題解決の行動に大きな影響を与える可能性がある。

例えば、環境問題解決への対策の一つとして、自然への態度に注目した環境配慮行動の促進要因の研究が行われている。それらの要因のうち心理的な特性として、Tam (2013) は自然への共感の特性的傾向が高いほど環境配慮行動が促進されると述べている。坂本 (2017) は共感に加えて畏敬の特性的感情傾向が環境配慮行動の促進要因となること、そしてその影響は共感よりも顕著であるという結果を得たという。

また、ある環境配慮行動を行う人は、他の環境配慮行動も行う傾向が高いことから、幅広い環境配慮行動実行の動機の基本となる「環境保護主義的アイデンティティ (environmentalist identity)」、また「環境保護追求 (environmental striving)」という概念 (Kashima et al. 2014) も提唱されている。この二つ特性の度合いが高い人は人間の環境 (活動領域) と自然環境を近い、あるいは重なるものとして考えているが、特に環境保護追求の度合いが高い人は、自然を人間よりも偉大なものあるいは超越しているものと考えられる特徴があるという。

このように、環境配慮行動の促進要因には自然に対する見方や態度が関連していると考えられる。林ら (1994, 1995) は、日本人の自然観について一連の調査を行い、環境保全対策のための日本人の自然への対応がどのような意識のもとになされ、科学技術と経済の発展のもとで昔からの自然観がどう残り、どう変化しているかを捉えようとした。林らの研究では、自然環境破壊の対策についての意識を次のように構成した。そこには、根底に宗教的な感情と動物・植物に対する感情などからなる素朴な感情があり、そこから自然に対する見方・考え方 (自然観) が生まれる。それらは国民性に象徴されるその土地での伝統あるいは文化の影響を受け、一方ではそれぞれ個人の自然との接触によって得られるもの、あるいは知識の影響を受ける。この基本的な自然観に、人間関係における信頼感、科学に対する信頼感を含めた科学文明観が関連しているというものである。一方、林らが行った一連の調査の結果を見ると、例えば自然に対する神秘感を持つ人、自然に従うべきと考える人が調査時の10数年前と比べて増加していたという。さらに、20代・30代の若年層で森林に人手を加えるべきでないという意見がより多いなど、自然に対する素朴で宗教的な感情が高まる傾向があったという。

以上のように、環境問題への意識は、自然観や科学観、宗教観などと関係しており、また世代によって自然に対する考え方や態度が異なることが明らかになっている。

## 2. 若者と自然観

自然環境の担い手となる次世代の若者たちの自然環境や環境問題への理解を深めるため、環境教育の分野では、適切な科学観、自然観の育成が重要視されている (丹沢, 1999)。また、丹沢によると、古代から神や宗教による自然観が作られ、その後近代になりようやく科学的自然観が成立したという。そのため、自然観には常に宗教的な見方が関連している。また、自然にとって人間はその存在自体が悪であるという意見もあるが、自然環境の保全のために必要な自然観を構築することには意味があるため、それをどのように確立し、教育に導入するかが課題だと考えられる。

川上ら (2009) は、大学生を対象とした調査結果をもとに、科学観、自然観を測定する尺度を構成するため、科学観、自然観に関する自由記述調査の結果などから得た40項目に関して因子分析を行い、6因子を抽出した。6因子のうち、自然観に関わる因子は、第1因子の「人間は自然に勝つことはできない」、「自然を人間の思い通りにすることはできない」などの項目で因子負荷が高く、自然は人間の力ではどうにもならないものであるとする自然観に関わる「人智を超えた自然」因子、また第2因子の「自然には柔らかいイメージがある」、「自然は優しいものである」などの項目において因子負荷が高く、自然は優しく癒しとなるもの、人間にポジティブな影響をもたらすものであるとする自然観に関わる「癒す自然」因子、そして第6因子の「自然は守るべきものである」、「自然がたくさんある場所は貴重である」などの項目において因子負荷が高く、自然に対して、これを守るものであるとする自然観にかかわる「保護を求める自然」因子であった。「人智を超えた自然」尺度、「保護を求める自然」尺度の得点に関しては、特に平均値が高く、自然をあるがままに保護することの意義、関心が大学生において極めて高いことが明らかになっている。

## 3. 自然観と科学観

上述したように、自然観と科学観はどちらも環境教育の中で重要な役割を果たしているが、自然と科学は対立して語られることが多い (川

上ら、2008)。自然であることからの意識的・意図的な逸脱が「科学」によってなされるという構図があり、例としては医学の領域での出産のコントロールといった生命倫理に関わる場面では、科学的な技術の利用が自然に反するものであるという考え方が見られる。さらに、自然と対立する「人工(物)」という概念を支えるのが科学であるといった考え、すなわち近代以降の人工物の多くは科学的な技術や知識によって作られてきたため、「自然でないもの」を作り出す技術を提供するのが科学であるという考え方もある。

西洋ではプラトンの思想やキリスト教の普及により、自然と技術を対立的に捉える考え方が主流になっており、自然は不完全なものであるため、人間の技術が自然を完成させると考えられていたという。一方、日本では自然を成り立たせる力は自然それ自体の中にある、つまり、自然自体のもつ生命力によって生成されるものと考えられてきたが、明治以降、国家的な規模で西洋文明を受け入れたため、西洋的自然観の影響を受けて、このような自然と科学を対立させるような考え方になじんでいったという。それでも日本人の中に、自然の神秘的な生命力に対する感受性は、現在でも失われていないと吉田(2011)は述べている。

一方、菅井(2010)は、今日の学校教育は、科学一辺倒で自然を学ばせ、現代の子どもたちは自然を畏敬する心を学ぶ機会が少ないという。平成29年告示の学習指導要領の小学校理科の目標は、「自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す」<sup>1)</sup>とされており、また中学校理科の目標は「自然の事物・現象に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す」<sup>2)</sup>とされている。一方、道徳の中では、小学校<sup>3)</sup>、中学校<sup>4)</sup>ともに学習指導要領の内容の「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」の中に「自然への畏

敬の念を持つ」という文言が含まれている。学校教育においては理科では自然を客観的・科学的に取り扱い、道徳では崇高なる存在として畏敬の念をもつことがねらいとされているが、菅井が指摘するように、道徳の場合、この視点は宗教的な問題とも深く関連してくるため、自然そのものに対する畏敬の念を涵養する視点が授業内容にどこまで盛り込まれているかは疑問であるという。また、同じ自然についての学習でも、理科と道徳という全く別の教科で関連づけて教育するといった考慮はあまりされていないようである。菅井は、現在教育の現場で行われているような「科学的自然観」のみを重視するのではなく、民族性や宗教、習慣など、人のものの見方や考え方の基盤となる「日本の自然観」をバランスよく取り入れ、日本人の多くが矛盾なく使い分けている科学と神仏への畏敬に関する感覚や考え方を自然教育の中に意識的に位置づけることが、「健全な自然観」、すなわちバランスのとれた自然観を育てると論じている。

#### 4. 自然観と宗教観

日本人の自然観は、その自然環境によって形成されてきたと言われる。豊かな自然に恵まれ、四季の変化が明らかな環境は、日本人特有の感情と生活様式を生み出してきた(陸・呉, 2011)。人々は自然の恵みをありがたく思い、森羅万象に大きな力の働きを感じて、自然そのものを神様として崇めたため、八百万の神々の信仰が生まれた。日本の原始信仰は、自然物への崇拜、精霊への崇拜という、いわゆるアニミズムの形態から神道へと発展してきた。

また、外来の宗教としての仏教も日本人の自然観に影響を与えたという。仏教の生命観では、生き物の殺生を必要最小限にとどめるべきと提唱されており、山川草木すべてが命を持っているとしている。仏教が国家鎮護の道具となり、その後本地垂迹説という、仏や菩薩が衆生を救うために神となって形を表すという説が発展し、神仏習合が普及していった(陸・呉, 2011)。そのため、現在でも日本人の生活の中には神仏が共存し、自然な形で溶け合っている。神道、仏教によって、日本人が自然を畏れ、

崇め、大切にするという自然観を形成してきたと考えられる。

日本人の宗教観の調査結果に目を向けると、2018年にNHK放送文化研究所が行った調査では、宗教を信仰していると答えた人は全体の36%であったという（小林、2019）。そして、宗教を信仰していると答えた人のうち、信仰心を持つと答えた人の割合が20年前、10年前と比べて減少し、2018年には53%まで下がっている。さらに、この調査では、だんだん日本人の伝統的な価値観だと捉えられてきた「お天道様が見ている」、「人智を超えた力の存在」、「自然に宿る神」といった感覚を持つ人が少なくなり、宗教に癒しを期待する人も減少しているという。一方、宗教に危険性を感じる人も半数を超えている。国際比較調査の結果でも、日本では他国と比べて宗教への無関心やあいまいな態度が際立っている（例えば金児、2004）。とはいえ、現在、初詣や墓参り、冠婚葬祭といった行事には若者も参加している人が多く、宗教心はないと認識していても宗教的な行動をしているのは日本人の特徴であると言える。

以上のような矛盾を踏まえ、西脇（2004）は、日本人の宗教性を探るための有効な切り口として、制度的な宗教ではなく自然観を取り入れ、「宗教的自然観」の概念構成を行った。宗教的自然観には、「自然の偉大さを感じる」「自然の中に神を感じる」といった自然に対する認識（「対自然認識」）の側面と、「壮大な自然に触れて己の存在の小ささを思い知る」と言った自分の存在のありよう、つまり自己存在のあり方に対する認識（「対自己認識」）の側面の二つがあるという。これらのことから、日本人の宗教性は自然とは切っても切れない関係にあると考えられる。

## 5. 自然観と災害

和辻（1935）は、日本のようなモンスーン気候の地においては、湿潤な気候が自然の恵みと暴威の両方をもたらすため、自然観が「受容的かつ忍従的」になったと指摘している。日本の自然と人間との関係は、弥生時代以降の農耕社会における自然との相互関係から培われてきた。洪水や火山噴火、地震などの災害は、人間

の力によって阻止できないが、一方で、河川の反乱によって豊かな養分を含んだ良好な農耕地が提供されてきた。また、アニミズム的自然観は、現代人の深層心理にも深く根付いており、「受容と忍従」による自然との共生の思想は、西欧近代化の真中にあっても、日本の文化として引き継がれてきた（松井、2013）。災害は、人間社会が自然環境の変化に適応できないときに生じる。自然と人間の関係性によって、特有の自然観が育まれ、災害観が形成される。

日本では、古くから大きな地震など様々な災害が起こってきたが、江戸時代には富士山や浅間山の噴火、各地の大火災、三大飢饉（享保、天明、天保）などによって「終末論」が喧伝されたという（松井、2013）。17世紀末頃からは災害について語る際、「世直し」という語も使われ始めた。1923年の関東大震災後に、これを天罰だとする「天罰論」が広く唱えられ、大正デモクラシーのなかで花開いた芸術や思想もやり玉に挙げられて、人々の贅沢や危険思想をいましめ、質実剛健の気風を発揮せよという精神主義が強調された。一方で、これが科学的な合理主義に導かれて、災害と闘う積極的発想を持ち始める契機にもなったという。

第二次世界大戦後に日本人は、敗戦による焦土からの復興のために「死と正面から向き合うことを避けてきた」が、東日本大震災後に改めて「形あるものは滅びるという死生観や無常観」に覚醒したと松井（2013）は指摘する。また、日本のマスメディアは、原則としてニュース報道で死体（遺体）を取り上げないため、災害死の無残さは、視聴者や読者の想像力に任されている。つまりマスメディアも死と正面から向き合うことを避けてきたため、直接被害に遭遇しない多くの人にとって、災害死はテレビや新聞の向こう側の他人事となっているという。これはある意味マスメディア側の視聴者に対する配慮だと思われるが、人々の災害に対する備えや覚悟をあいまいなものにしている要因だという。ジャーナリズムの役割の一つは災害の経験を正しく伝承し、防災文化を育むことで社会の防災力向上に取り組むことだと松井（2013）は述べている。現在でも自然災害は常に日本人の生活と関わっているが、それらの情報は表面

的な知識になりがちで、直接体験していない人々にとっては、深い理解を呼び起こすものにはなっていない可能性があるだろう。

## 目 的

本研究では、以上のような日本人の自然観に関する先行研究をもとに、将来の環境配慮行動の主な担い手となる若者の自然観とそれに関連する意識や行動をインタビュー調査で探る。今回は、大学生にインタビュー調査を行い、自然との関係や自然に対する態度、環境問題への関心や科学観、宗教観、災害観などについてまずその概要を明らかにする。以上の結果により、本論文ではまず環境問題解決のためのアプローチを探る予備的考察を行うことを目的とした。

## 方 法

2017年2月に東京都内の私立大学に通う大学生（年齢：19歳～23歳、男性5名、女性5名）10名を対象とし、半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。対象者の出身地は大都市が2名、大都市郊外が6名、田舎が2名だった。子どもの頃身近に自然があったと答えたのは7名だった。主な質問内容は、生い立ち、過去から現在の自然との関わり、自然に対する考えやイメージ、自然と科学技術の関係についての意見、宗教観、災害観、環境問題に関する意識などであった。

## 結 果

### 1. インタビュー結果の概要

今回の結果の分析に際しては、質的な分析により、それぞれのインタビューの結果を調査対象者・テーマごとに意味の縮約を行った。結果の概要を表1に示す。また、表1の結果をもとに、以下で結果について述べる。

### 2. 自然について

対象者の出身地は都会・郊外・田舎と多岐にわたっていたが、自分が思い出す「自然」としては、育った場所で触れた身近な森や緑、水辺をイメージする場合や、家族でキャンプへ行った場所などが多かった。自然のイメージとしては、森・山・木・川がよく挙げられていた。

一方、同時に多くの回答者が、自然とは人が手を加えていないもの、人工的でないものと捉えていた。そして、手を加えずにそのままの状態である自然が好まれる、又はあるべき姿であると多くの回答者が考えていた。

さらに、静かなイメージ、心が落ち着く、居心地がよい、息抜きをするといった癒される自然のイメージも多く言及されていた。きれいなもの、壮大さを感じるという意見も見られた。学校の校庭にあった大きな木に見守られていると感じた経験のような擬人化、あるいは神格化された自然のイメージも見られた。

また、人間の手ではコントロール不可能なもの、怖いもの、逆らえないものといった、人間の手に負えない怖い存在という言葉も見られた。

### 3. 自然と科学技術の関係について

自然と科学技術は対立関係にあり、自然の方が科学技術より強大で怖いもの、そして科学技術では自然をすべてコントロールすることはできないというイメージが多く言及されていた。自然と科学技術のバランスが大切である、また自然を保護しながら、悪影響を与えずに科学技術を発達させるべきだという意見も見られた。全体的に抽象的な意見が多く、科学的な知識に基づいた言及はほとんどなかった。

### 4. 宗教について

すべての対象者が特定の宗教を信仰していないと答えていた。また、宗教的な関心がないと答えた回答者もいた。一方、ほとんどの回答者が初詣をし、先祖の墓参りをすると答えていた。ご先祖様が守ってくれる、神様は存在する、悪いことをすると罰が当たると答えた回答者も多かった。さらに占いを信じたり、縁起を担いだり、お守りを買ったりという宗教的な活動も多く言及されていた。これらの結果より、若者は特定の宗教への信仰は持たないが、ある程度宗教的な意識を持ち、関連する行動を行っていることが明らかになった。また、宗教を信仰することに関しては、悪いイメージがあるなどネガティブなイメージを持つ者もいた。海外でイスラム教の信者に接し、信仰することは大変で

表1 インタビュー結果の概要

テーマ	主な言及内容
自然	<p>人の手が入っていないもの(女・22歳)・人工的でない、人が手を加えていないもの、日常生活とはかけ離れていて逆らえないもの、森のイメージ(女・21歳)・森、緑、木のイメージ、怖いもの(女・21歳)・逆らえない、人間の手ではコントロール不可能な存在(女・21歳)・森、山、川のイメージ、静かなイメージ、きれいなもの、人が手を加えていない人工的でないもの、人間が生きていく上で必要なもの、自然のままが自然(男・21歳)・森、田舎、山と川のイメージ、身近な自然で心が落ち着く、居心地がいい(女・23歳)、壮大さを感じるもの(男・22歳)・緑と花、山のイメージ、なくなったら人間が困るもの、あると落ち着くもの、人間が手を加えずにそのままの状態にするべき、与えられた環境を守るべき(男・19歳)、心を落ち着かせてくれる、手を加えずに利用するもの(男・22歳)、森、美しい景色、絶景、触れることで息抜きをする(男・22歳)、大きな木に見守られていると感じたことがある(男・21歳)</p>
自然と科学技術の関係	<p>自然と科学技術は対立している(女・22歳、男・22歳)・科学技術より自然が強い(女・21歳、女・21歳)・科学技術は進歩しているが、自然に負けるリスクが大きい(女・21歳)・科学技術で自然をすべてコントロールできるわけではない(女・21歳、女・21歳)・科学技術より自然が上(21歳・男)・自然を保護しながら科学技術を発達させるべき、自然に悪影響を与えず開発すべき(男・22歳)・自然と科学技術のバランスが必要(男・21歳、男・19歳)</p>
宗教	<p>特定の宗教を信仰していない(全員)・宗教的な関心無し(男・22歳)・初詣に行ってお祈りをする(全員)・ご先祖様が守ってくれる(女・22歳)・お守りを買う(女・22歳、女・21歳)・神様は存在する(女・21歳、男・19歳、男・21歳)・悪いことをするとバチが当たる(女・21歳)・先祖のお墓参りに行ったことがある(女・22歳、女・21歳、女・21歳、男・21歳、男・22歳)、占いをする(女、21歳)・縁起を担ぐ(男・19歳)・神社でお祓いをしたかったことがある(男・22歳)・宗教を信仰するのは悪いイメージ、いいイメージない(男・22歳、男・21歳)・海外に行った時、イスラム教は大変そうと感じた(女・23歳)</p>
災害	<p>地震は止められない(女・21歳)・自分ではどうしようもない(女・22歳)・対策をしても駄目、人間がコントロールできない(女・21歳)・防ぎようがない、人間は無力、予測できない怖さがある(男・21歳、男・19歳)・自然災害は予測できず怖い(女・21歳、男・19歳)・恐怖を感じる(男・22歳、女・23歳、女・21歳)・人間が事前に準備できない(男・21歳)</p>
環境問題	<p>あまり関心はない(女・23歳、女・21歳、男・21歳)・自分には関係がない(女・22歳)・学校で習ったが、あまり身近に感じない(女・23歳)・環境問題の悪化を実感できない(女・21歳)・地球温暖化、大気汚染、関心はあるが、メディアの報道ではあまり危機感を感じない、対策があまり報じられない(男・19歳)・身をもって体感しないと危機感を持たない(男・21歳)・自分に害があると関心を持つ(女・21歳)・環境問題の解決には知識が必要(男・21歳)・ゴミ問題、海洋汚染(男・22歳)・大気汚染、生態系のバランス(男・22歳)・ゴミ問題、絶滅動物、森林伐採、ニュース映像で中国の人がマスクをしている大気汚染の様子(男・21歳)・地球温暖化、水質汚染(女・23歳)、森林伐採、酸性雨、オゾン層破壊(男・21歳)・地球温暖化、大気汚染、ゴミ問題、温暖化がもっと進むと歯止めが利かなくなる(女・21歳)</p>

面倒だ、何をそんなに信じているのかわからなかったという感想を述べた回答者もいた。

## 5. 災害について

災害については、自分ではどうしようもない、対策をしても駄目、人間がコントロールできない、無力、防ぎようがない、怖いといった、人智を超えたものといった表現が多かった。東日本大震災の地震や津波などのメディアでの報道について話す回答者もいた。特に津波に関しては、逃げられない恐怖を感じたと語る回答者もいた。災害についてのイメージは、諦めや無力感、恐怖の感情が伴っており、災害対策についての自己効力感が低かった。

## 6. 環境問題について

環境問題については地球温暖化、大気汚染、ゴミ問題、海洋汚染、水質汚染などに言及した回答者が多かった。あまり関心が無い、自分には関係ないという回答も多く見られた。また、メディアの報道では環境問題に関する危機感を感じられない、対策があまり報じられない、と言及する回答者もいた。さらに、学校で環境問題について勉強したが、あまり身近に感じない、身をもって体感しないと被害があると言われても実感がなく、危機感を持っていないといった回答が得られた。

大気汚染の問題について触れた回答者のほとんどが、テレビニュースで見た中国での大気汚染とマスク姿の人々の映像に言及していた。一方、温暖化が進むと歯止めが利かなくなるという意見も聞かれた。さらに、環境問題の解決には、知識が必要であるという言及もあった。

## 考 察

インタビュー調査の結果明らかになったこととして、若者は、自然とは人の手が加わっていないものであり、またそれが本来の自然であると考えている傾向があることが挙げられる。また、人間の手ではコントロールできない存在、美しさや壮大さ、見守られていると感じるという意見もあった。この結果は、林ら（1994, 1995）の、若年層の方が森林に人手を加えるべきでないという意見が多いなど、自然に対する

素朴な宗教的な感情が高い傾向があったという結果と一致する。そして川上ら（2009）の自然をあるがままに保護することの意義、関心が大学生において極めて高いという結果とも一致する。さらに、川上らは、若者が考える自然に関する因子として「人智を超えた自然」、「保護を求める自然」、「癒す自然」という3つを調査結果より明らかにしているが、今回のインタビューで得られた自然についての言及も、同様に以上の3つの因子に関連していた。

一方、回答者の自然観には全体として情緒的なイメージや言及が多く、科学的な視点の言及はほとんど見られなかった。さらに、科学技術は自然と対立するもので、科学は自然に対して無力であるという意見が多かった。学校教育においては、自然を科学的に捉える授業内容が教えられているにも関わらず、自然を科学的に捉える、すなわち科学的自然観と言える回答がほとんどなかったことは興味深い。また、科学技術より自然が勝るといった無力感を伴う見方も多く見られた。

宗教観については、特定の宗教を信仰している回答者はいなかった。制度的宗教への関心は低かったが、一方、神様の存在を信じるという言及が多かった。また、初詣に行く、お墓参りに行くなどという宗教的な行動に加え、ご先祖様が守ってくれる、悪いことをするとバチが当たるなどの宗教的な考えを持つ対象者も多かった。前述した、宗教心はないと認識していても宗教的な行動をしているという日本人の特徴が若者にも当てはまるということがわかる。

さらに、回答者らは身近な自然にも「畏敬」を感じ、自然は神秘感を持つ対象である、また人間がコントロールできない、あるいはしてはいけない対象であると考えていた。以上の結果は、林ら（1994, 1995）の、自然観の構造の根底にある宗教的な感情から、自然に対する見方・考え方が生まれるという指摘とも一致する。

災害に対しては、防ぎようがない、人間は無力だ、怖い、準備や対策をしても駄目といった意見が多く言及された。つまり、災害をコントロールすることに対する自己効力感が低く、諦めや恐怖の感情が伴った回答が目立った。災害について質問をすると、ほとんどの回答者が東

日本大震災のことに言及し、その際にテレビで見た津波のニュース映像やその際に感じた恐怖感に触れていた。前述した松井（2013）の日本人は東日本大震災後に改めて「形あるものは滅びるという死生観や無常観」に覚醒したという指摘の通り、若者も東日本大震災のイメージが災害への無力感に影響を与えていると考えられる。

最後に環境問題に関して、今回の結果では、調査回答者の環境問題に対する関心は概して低く、また環境問題に危機感を感じている回答者は少なかった。色々な環境問題について挙げている通り、環境問題に関する知識は持っているが、科学的で具体的な情報をあげた回答者は少なかった。また、メディアであまり報じられない、対策が報じられない、危機感を持っていないといった言及も見られた。このように、若者が関心を持たずまた危機感を感じていなければ、環境保全行動は起こりにくいと考えられる。

以上の結果をもとに考えると、今後の環境保全の担い手となる若者は、自然に対する畏敬の念に加えて科学的な知識や視点を持つことが必要だと思われる。それにより、環境問題に対する真の関心を醸成し、解決への動機づけや自己効力感を高めることが可能になるのではないだろうか。今回の結果では、回答者の多くは人間の手を加えないのが理想の自然のあり方だと考えていたが、環境を保全していくためには人間の手を入れることも時には必要だろう。そのためには科学的な知識や視点を得ることが欠かせないと考えられる。小学校、中学校での学校教育では、自然を科学的に捉える教育がなされているというが、その自然観が若者の持つ自然への素朴な宗教的感情とうまく結びついていない可能性も考えられる。現在では、自然の科学的な視点を理科で、そして畏敬の念は道徳で、といったようにバラバラに教育が行われているが、自然については情緒的な感覚や畏敬の念を持つことのみならず、科学的な知識を基に、自然環境に配慮あるいは保全する考え方を持つことも必要であるため、両者を結び付けた教育が必要ではないかと考えられる。

なお、今回の研究は調査対象者の人数が限られているため、結果の一般化には一定の留保が

必要である。また、テキスト分析などにより、さらに詳細な分析を行えば、新たな知見が得られる可能性もあるだろう。今回の結果を元に、さらに対象者数を増やし、若者との世代との比較を行うことによって、若者の自然観の特徴とその背景をより深く捉えることができると考えられる。

付記：本研究は、日本社会心理学会第59回大会において発表した「若者の自然観と環境問題－インタビュー調査による予備的考察－」の内容に加筆修正したものである。また、本研究は平成27～平成30年度科学研究費補助金基盤研究(C)（課題番号15K00661）「環境問題報道におけるメディアフレームとその受容に関する実証的研究」（研究代表者：川端美樹）の助成を受けて行われた。

## 【引用文献】

- 林 文・林 知己夫・菅原 聡・宮崎 正康・山岡 和枝・花房 英光（1994）. 日本人の自然観についての予備的考察, *INSS JOURNAL*, 1, 159-175.
- 林 文・林 知己夫・菅原 聡・宮崎 正康・山岡 和枝・北田 淳子（1995）. 日本人の自然観（2）, *森林野生動物研究会誌*, 21, 44-52.
- 金見 恵（2004）. 日本人の宗教的態度とその精神的健康への影響—ISSP調査の日米データの2次分析から— *死生学研究*, 3, 348-367.
- Kashima, Y. et al（2014）, Environmental identity and environmental striving. *Journal of Environmental Psychology*, 38, 64-75.
- 川上 正浩・小城 英子・坂田 浩之（2008）. 大学生の科学観・自然観について *The Human Science Research Bulletin*, 7, 57-65.
- 川上 正浩・小城 英子・坂田 浩之（2009）. 大学生の科学観・自然観について（2） *The Human Science Research Bulletin*, 8, 61-69.
- 小林 利行（2019）. 日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか～ISSP国際比較調査「宗教」・日本の結果から～放送研究と調査 69（4）, 52-72.
- 松井 一洋（2013）. 「日本人の災害観と防災文化」再考 *広島経済大学研究論集*, 36（3）, 1-14.
- 西脇 良（2004）. 日本人の宗教的自然観—意識調査による実証的研究 ミネルヴァ書房
- 陸 薇薇・呉 未未（2011）. 「共生思想」の原型—日



- 本的自然観の探求 愛知工業大学研究報告, 46, 13-17.
- 坂本 剛 (2017). 木に対する心的機能の帰属が環境配慮に及ぼす影響, 日本社会心理学会第58回大会発表論文.
- 菅井 啓之 (2010). 本来的自然観に基づく自然教育の構想, 京都ノートルダム女子大学研究紀要, 40, 13-24.
- Tam, K. (2013). Dispositional empathy with nature. *Journal of Environmental Psychology*, 35, 92-104.
- 丹沢 哲郎 (1999). 日本の子どもの有する科学観と自然観—質的調査結果をもとにして—科教研報, 13 (4), 43-46.
- 吉田 喜久子 (2011). 科学技術文明と日本人の自然観 人間と環境, 2, 162-143.
- 和辻 哲郎 (1935). 風土—人間学的考察 岩波書店

**【注】**

- 1) 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領 (平成29年告示) ([https://www.mext.go.jp/content/1413522\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf)) (2020年10月1日閲覧)
- 2) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説 (平成29年告示) 理科編 ([https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018\\_005.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_005.pdf)) (2020年10月1日閲覧)
- 3) 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領解説 (平成29年告示) 特別の教科 道徳編 ([https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_012.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_012.pdf)) (2020年10月1日閲覧)
- 4) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説 (平成29年告示) 特別の教科 道徳編 ([https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018\\_011.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_011.pdf)) (2020年10月1日閲覧)